

# 「橘」に寄せる恋：人麻呂歌集二四八九番歌の解釈

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-04-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉住, 薫 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7502">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7502</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## 「橘」に寄せる恋

——人麻呂歌集二四八九番歌の解釈——

倉 住 薫

はじめに

万葉集卷十一には、以下の人麻呂歌集歌が収載されている<sup>(1)</sup>。

たちばなもと  
橘の本に我立<sup>しづえ</sup>下枝取り成らむや君と問ひし子らはも

橘 本我立 下枝取 成哉君 問子等

(11)二四八九

二四八九番歌は、「橘」の木の本で「下枝」を手に取り、「成らむや君」と尋ねた「子」を追憶する歌である。略体歌である二四八九番歌は、第三句まで助辞が記されておらず、第二句の傍線部「我立」には訓読の異同があり、かつ「我」を単数とするか複数とするかによって、解釈も分かれている。

また「寄物陳思」に収載された二四八九番歌は、二四八四番歌から続く「木に寄せる」六首の最後に位置している。窪

田評釈は「劇的な情景で、相應に複雑したものを一首の短歌にしてゐる、嘆ずべき技巧のもの」、釈注は「相手の行為と言葉を取り込んですこぶる具象性に富み、心にしみこむ歌」「素朴に実に即していることで、万葉歌が結構、古今東西に通ずる普遍性を發揮しえた見本のような歌」と述べる。こうした評価が示すように、序詞が多く用いられる「寄物陳思」歌にあつて二四八九番歌は、景物に寄せて描かれる情景が極めて具体的であるという特質を持つ。「はも」という詠嘆によつてのみ陳べられるその愛惜の情は、「下枝」を手に取り「成らむや」と尋ねる「子」を叙述することによつて描き出される。したがつて、愛惜の思いを導く「子」の行為の描写を、さらに検討することが、「寄物陳思」歌である二四八九番歌にとって重要なのである。

本稿では、二四八九番歌の訓読を検討し、「橘」の本での逢瀬の状況を明らかにし、あわせて「寄物陳思」部の「木」に寄せる六首の内実についても論じていきたい。

## 一 「我立」の訓読

第二句「本我立」の訓読は、諸本では「モトニワレタチ」で一致しているが、諸注釈書では以下のように異同がある。

①モトニワレタチ…諸本・拾穂抄・代匠記・童蒙抄・略解・古義（アレ）・野雁新考（アレ）・折口口訳・鴻巣全釈・

佐佐木評釈・全註釈・窪田評釈

②モトニワガタテバ…総釈

③モトニワレタツ…私注

④モトニワヲタテ…新訓・新校・全書・大成本文篇・大系・注釈・集成・旺文社・全訳注・釈注・新校注別訓・全歌・

全解

⑤モトワレトタチ…森本治吉『万葉集新見』<sup>2)</sup>

⑥モトニワガタチ…単数―井上新考(アガ)・茂吉評釈

…複数―全集・大岡信『私の万葉集』<sup>3)</sup>・新編・埜・全注・新大系・新校注・和歌大系・岩波文庫

以上のように、六種の訓読が提唱されているが、訓読により解釈も大きく異なっている。諸本以来の訓読であり江戸期以降、窪田評釈まで受け継がれた①「モトニワレタチ」は、「木の下に私が立つて」と解釈される。この「ワレ」を、代匠記では「女の身の我なり」と、女性と捉える。童蒙抄・略解・古義・折口口訳・鴻巣全釈も同様に「ワレ」を女性とする。つまり、「橘」の木の下に立ち「下枝」を取り「成るだろうか、君(あなた)」と尋ねた「子」である女性を「ワレ」と理解する。だが、第五句においては「子」と呼ぶ女性を「ワレ」と称することには違和感がある。

①の訓読を採る拾穂抄・佐佐木評釈・全註釈・窪田評釈は、「ワレ」を詠み手である男性とする。「橘」の木の下に私は立ち「下枝」を取り、「成るだろうか、君(あなた)」と尋ねた「子」を回想する歌と解釈される。「ワレ」を詠み手の男性とする解釈も、注釈が「第三句以下の女の言行と一つゞきになつておちつかない」と指摘するように、行為主体が途中で入れ替わることとなり、歌として完結しがたい。また略解は第三句までを序とし、全註釈も「以上序詞。果樹のもとに立つて、成るか成らないかと問う行事を序して、次の、成ラムヤの序としている」とする<sup>4)</sup>。確かに「寄物陳思」には序詞を用いる歌が多いが、茂吉評釈は「上半は序詞と看做すべきだが、例によつて寫生から來てゐるから、必ずしも序とせず、意味を持たせて解釋することも出来る」とする。茂吉評釈の指摘の通り、第三句までがたとえ「成らむや」を導く序であつたとしても、序の具体的叙述は、思い出の情景によると捉えるのが自然であり、「ワレ」も歌に関わる特定の個人と理解する必要がある。

「ワレ」を詠み手としても「子」と称される女性としても、①の訓読では、行為主体の問題が生じてしまう。

そこで、②「モトニワガタテバ」と「橋の木の下に自分が立つてゐると」と、順接の確定条件とし、行為主体が転換する不自然さを解消する訓読が提案された。しかしながら、②では字余りとなり、従えない。

私注は③「モトニワレタツ」と訓み、「橋の木の下に我は今來つて立つ。かつて此の下枝を取つて、成りましたかと問うた少女は、どうして居ることであらう」と訳す。つまり、第二句を区切れとみるのであるが、詠み手が木の下に立っている現在と、第三句以下の「子」が尋ねた過去とが一首の中に詠み込まれることとなり、「寄物陳思」の歌として、景と情との対応が不明確となるため、採りがたい。

④の「モトニワヲタテ」は、「子」が「我」である詠み手を「橋」の木の下に立たせて、「子」が「下枝」を「取り」、詠み手に尋ねるという意味になる。「立つ」を他動詞として理解するのだが、⑤を支持する森本が「人を、佇立させると云ふ意味の「立つ（他動詞）」といふのが、集中の用例甚だ稀である」と指摘するように、人を立たせる意の他動詞「立つ」は以下のように東歌に三例みられる。

- 1 麓玉の寸戸の林に汝を立てて行きかつましじ寝を先立たね  
(14)三三五三 東歌 遠江国相問
- 2 には鳥の葛飾早稲をにへすともそのかなしきを外に立てめやも  
(14)三三八六 東歌 下総国相問
- 3 梓戸欲良の山辺のしげかくに妹ろを立ててさ寝処扱ふも  
(14)三四八九 東歌 未勘国相問

1は旅立ちの見送りに「汝」である妻を「寸戸の林」に立たせたこと、2は「葛飾早稲をにへす」つまり新嘗の祭りの際であっても愛しい恋人を戸外に立たせることはできないこと、3は共寝の床を整えるため「妹ろ」を山の繁みに立たせたことが詠まれる。見送りや戸外での共寝の準備のために、男性が女性を立たせるのであり、たとえ神を迎える祭りの際

であつても、女性が男性を立たせることは詠まれない。当該の二四八九番歌においても、女性である「子」が男性である「君」を立たせたと考えがたい。

⑤「モトワレトタチ」は、詠み手と「子」とが共に「橘」の木の下に立ち、詠み手に「子」が尋ねるといふ解釈である。二人で立つのであれば、行為主体の転換は生じず、無理のない解釈である。だが、注釈が「と共に」の意の「と」は……表記がなされてゐるのが通例」と指摘するように、助詞「ト」は人麻呂関係歌において以下の表記例がある。<sup>5)</sup>

- |   |                |   |              |   |              |
|---|----------------|---|--------------|---|--------------|
| a | 「妹等吾見」(⑨二七九八)  | b | 「君与時々」(②一九六) | c | 「妹与吾」(⑦二二九〇) |
| d | 「孫星与織女」(⑩二〇二九) | e | 「汝吾」(⑪二四一九)  |   |              |

aは「等」、bは「与」で表記され、cでは「妹」「吾」、dでは「孫星」「織女」の間に「与」があり「ト」の訓み添えは容易である。また無表記例のeも「汝」「吾」が並記されるため「ト」は容易に訓み添え可能である。つまり、人麻呂関係歌において「共に」の意の助詞「ト」は、表記されるか、あるいは「共に」の対象が並記される場合に限られるのである。当該の二四八九番歌では「共に」の対象は並記されておらず、「ト」の訓み添えを行うことは不適當と言える。

⑥「モトニワガタチ」は、「橘」の木の下に、単数「私が立って」、複数「私たち二人が立って」と二つの解釈がある。単数とする井上新考は、「ワ」を「男子即作者」とし「君」を「媒」と理解する。だが、媒介者を詠み手が「君」と呼んだと捉えるのは、万葉集の例に照らして、無理があると言わざるを得ない。

複数とする全集が「ワ」を「このワは、われわれ。」と複数と指摘して以来、多くの注釈書がこれに従う。菊澤季生は「假字書きの確かな」ワ・ワレは「複数の、一般的」とし、ア・アレが「単数的、孤獨的(従つて愛戀的)」であるとし、一人称複数の「ワ」の存在を指摘する。<sup>6)</sup>⑥「モトニワガタチ」を採用するのは、特に言及がないものが多いが、菊澤の指

摘を受けてのものである<sup>(7)</sup>。二四八九番歌を一人称複数で解釈すると、「我」と「子」の私たち二人で「橘」の木の下に立ち、その時に「子」が「橘」の「下枝」を手に取り、「我」に「成らむや、君」と尋ね、その「子」を思い出す歌となる。「我」を「私たち二人」と理解すると、歌の中で行為主体の転換が生じず、「我」と「子」とが体験した過去となるため、⑥「モトニワガタチ」と訓読し、一人称複数の「ワ」と解釈するのが穏当である。つまり二四八九番歌は、「橘」の木の下での「我」とあの「子」との逢瀬を追憶する歌なのである。

## 二 「橘」の「本」<sup>もと</sup>での逢瀬

これまで述べてきたように、二四八九番歌は、「橘」の木の下での「我」と「子」との逢瀬の記憶を詠んだ歌であるということができよう。「木に寄せる」という「寄物陳思」の形式を持つ二四八九番歌において、「橘」の木は、逢瀬の記憶を導く景物として機能している。

「橘」とは、コミカンと称される紀州みかん、あるいはニッポンタチバナ（ヤマトタチバナ）のこととされる。いずれも、二〜四メートルほどになる常緑小高木であり、五六月に香りの高い白い花を咲かせる。直径三〜五センチメートルほどの滑らかな実が十二月頃に熟す<sup>(8)</sup>。二四八九番歌では、花を咲かせているかは不明だが、まだ実をつけていない「橘」が詠まれている。「子」が「橘」の「下枝」を手に取り「成らむや、君」と問うのは、早くに拾穂抄が「人のあふ事なるといへはなるへし」、代匠記初稿本が「戀の成就するによそへたるなり」と指摘するように、「我」二人の恋の行く末を尋ねることである。

本節では、「橘」の「本」での逢瀬について、植物が実ることの意味と植物を手に取る行為に注目して考察してみたい。

〔橘〕の実り

万葉集において、植物の成長と恋の進展とを重ねて詠む例がある。諸注釈書において、指摘があるのは以下の二首である。

4 向つ峰むかに立をてる桃ももの木成ももらめやと人そささやく汝なが心ゆめ

(7) 一三五六 作者未詳

5 大和やまとの室生むろふの毛桃けもも本繁もとしげく言ことひてしものを成ならずは止やまじ

右の一首、菓このみに寄せて思おもひを喩たとへたるなり

(11) 二八三四 作者未詳

4は井上新考が類歌とした譬喩歌「木に寄せる」、5は新大系・岩波文庫が指摘した「菓に寄せた」譬喩歌である。4は「桃」・5は「毛桃」が「成る」つまり実ることに恋愛の成就が譬えられている。5は打ち消し意思「じ」を伴い、恋を成就させるといふ強い思いを詠み、4は、人は実らないといふがあなたの心は揺らいではいけないと、禁止表現「ゆめ」を伴い、恋の成就を強く願う。進展し結実させたいと強く思う恋が、植物の〈実り〉に譬えられるのである。当該の二四八九番歌と同じく、「橘」が「成る」ことを詠むのは以下の二例である。

6 我わ妹子むすこがやどの橘たちいと近く植うゑてし故ゆゑに成ならずは止やまじ

(3) 四一一 作者未詳

7 君きみが家の花橘はなたちはなりにけり花はななる時に逢あはましもを

(8) 一四九二 遊行女婦

6は、次の坂上郎女の橘の歌に対し応えた歌である。



おほとものさかのうへのいらつめたちばな  
大伴坂上郎女の橘の歌一首

橘をやどに植ゑ生ほし立ちて居て後に悔ゆとも験あらめやも

(四一〇)

坂上郎女の歌では、「橘」を大切に育てたことが歌われ、6は、すぐ近くに植えられたその「橘」を実らせないままで終わらせないと歌う大伴駿河麻呂の作ともされる歌である。「橘」は手塩にかけて育てた娘の譬喩であり、その娘との恋の成就が「橘」が「成る」ことに譬えられる。6でも打ち消し意思「じ」が用いられ、「橘」の〈実り〉、すなわち恋の成就への熱情を読み取ることができる。7は、実ってしまった「橘」が「花」であった時に出会いたかつたと歌う。他の人と成就してしまった恋が「橘」の〈実り〉として詠まれている。他の人が入り込む余地のない結びつきの強い恋の成就だからこそ、散ってしまう花ではなく、堅い実に譬えられるのである。

つまり、植物の〈実り〉は恋の成就の比喩であり、その比喩が用いられる場合、不安定ではかない恋を、堅く結実させたい(させたかった)という強い願いがある。

〈植物を手に取る意味〉

次に、植物を手に取るという行為について考察していきたい。二四八九番歌の「下枝取り」について、集成・釈注はともに「枝を取り持てば木精が感染し、よい事があるとされた」と述べる。確かに、古事記の思国歌の「髻華に挿せ その子」(日本書紀では思邦歌「髻華に挿せ 此の子」)のように、植物を手にとる行為には呪的力を得るといいうわゆる(共感呪術)の発想が基盤にあるだろう。ただし、思国歌の場合も「熊白禱が葉」という生命力豊かな植物を「髻華」に挿す、つまり髪に挿し身体に触れさせることが重要であり、〈共感呪術〉においては手に取ることの意義は薄い。万葉集においては、植物を手に取ることが、以下のように愛しい者との関係で詠まれることがある。

8 なでしこがその花にもが朝あさな朝あさな手に取り持ちて恋ひぬ日なけむ

(③四〇八 大伴家持)

9 目には見て手には取らえぬ月の内の桂かづらのごとき妹いもをいかにせむ

(④六三二 湯原王)

10 向むかつ峰をの若桂わかかづらの木下枝しづえ取り花待まついに嘆なげきつるかも

(⑦一三五九 作者未詳)

11 このしぐれいたくな降りそ我わ妹子もこに見せむがために黄葉もみぢ取りてむ

(⑱四二二二 久米広繩)

8 は、なでしこの花であれば毎朝「手に取り持」つて恋い慕うだろうと、家持が大嬢に贈った歌である。9 は、目では見えるが「手には取」ることのできない中国の俗信に基づく「月の内の桂」に「妹」を譬えた湯原王の歌である。10 は譬喩歌「木に寄せる」であり、「若桂の木」の「下枝」を手に取り「花」が咲くのを待つ間に何度も嘆いたことが歌われる。「若桂」にはうら若い女性が譬えられ、その少女が「花」を咲かせる、つまり成長するまで待つことが詠まれている。「向つ峰」にあるような自分とは離れた存在の少女をそば近くに置き、何度も嘆くほど成長するのを心待ちにしていたことが詠まれる。また宴席歌である11では、「我妹子」に見せようと「黄葉」を手に「取」ることが歌われている。いずれも、男性が植物を手取る例ではあるが、美しい植物は11のように折り取つて二人で賞美するものであり、8のように離れた思ひ人に触れることが身近にある「なでしこ」を手折ることに仮託され、9においては植物も恋人も愛でるだけでなく、手元に置き触れたいものとして表現されるのである。植物の成長は恋の進展をも意味し、本来ならば心待ちにするものである。だが、10では、「向つ峰」という自分とは縁の薄い場所にいる「若桂」に譬えられるような少女が詠まれる。自分とは遠い存在であるため、少女は今後は誰と恋に落ちるかも分からない。手に取りそばに置き、自分との恋の成就を願うが、そばに置いてもお度も嘆いてしまうのだ。恋とは、手元にあつても思い通りにならないものであるとの認識がうかがえる。すなわち、植物を手取るのは、確信を持つことのできない相手の心や壊れやすい恋の関係を、しっかりとつ

なき止めたい、という思いに裏打ちされた行為なのである。

これらの例から、当該の二四八九番歌において「子」が「橘」の「下枝」を手に取り、「成らむや、君」と尋ねるのは、「子」は「我」二人の恋の行く末を心に鮮明に描き、その恋の成就を強く願うからに他ならないと言えるだろう。「橘」の「下枝」が必ず実をつけるように、「子」自身の思いは決まっており、恋の行方をどう考えているのかと「君」に尋ねるのである。岩波文庫は「恋の行く末を不安がる女の言葉」と指摘するが、覚悟を決めた「子」が、二人の恋の行く末を「君」に委ねたと解釈するのが妥当であろう。

さらに、「子」が強く願う恋の成就の比喻として、数ある〈実り〉の中で、「橘」が用いられることにも注目すべきである。常緑樹である「橘」は、佐佐木評釈が指摘するように「當時街路樹として植ゑられた」ものでもある。雄略紀十三年三月条に「餌香市辺の橘の本」とあり、餌香の市には「橘」が植えられていたことが分かる。万葉集にも街路樹の「橘」を詠む以下の歌がある。

- 12 橘たちばなの影踏む道の八衢やちまたに物をそ思ふ妹あに逢はずして  
 13 橘たちばなの本もとに道踏むやちまた八衢やちまたに物をそ思ふ人に知らえず

(2) 二二五  
 (6) 一〇二七

12は園臣生羽の娘を娶って間もなく病に臥した三方沙弥が作った歌三首の内の一、13は豊島采女の歌あるいは12の歌を知っていた豊島采女が「口吟」したとされる歌である。12・13には道が分岐する「八衢」での逢瀬が詠まれる。「八衢」は多くの道が集合する辻であり、「市」と同様に人の往来の多い交通の要所でもある。「市」や「八衢」に植えられた「橘」の「影」を踏み、「妹」に逢うこともなく（用例12）、あるいは人知れず（用例13）、思い悩みながら道を歩くことが歌われる。「橘」が植えられた道は、「恋の通い路」（全註釈）であり、「橘」の木蔭は逢瀬の場となる。さまざまな男女の出会い

いの場となった「橘の本」での逢瀬が叶わない時、入り組んだ分かれ道のように物思いに沈むのである。

「橘の本」は、男女の恋を想起させる場であり、当該の二四八九番歌も、男女の思い出の場である「橘の本」での逢瀬が描かれている<sup>⑩</sup>。二四八九番歌は、多くの男女が恋を成就させたであろう「橘の本」で、「我」二人の恋の成就を尋ねた「子」を回想する。「橘」の「下枝」を手に取り「成らむや、君」と尋ねたのは、「子」の思いは決まっており、恋の行く末を「君」に委ねたということになる。そうした「子」を追慕するのは、早くに代匠記が「後はおひみぬ」と指摘するように、恋が成就しなかったことを意味している。多くの男女が恋を成就させた「橘の本」での逢瀬であるが、「我」二人の恋は実らなかったのである。

### 三 「はも」による回想

ここで、成就しなかった「恋」が、「はも」によって回想されることに注目したい。「はも」は『時代別国語大辞典 上代編』において、

特別な、極限的な状況にある対象への詠歎になりやすく、かつそのような状況は、話し手と過去に特定の交渉があったて現在は存在しないものや遠く離れているものの表現に適しているのである。

と指摘されるように、現在は交渉のない対象を回想した際に生じる詠嘆の表現である。「はも」が描くのはどのような回想であるのかに注目し論じていきたい。

万葉集において文末に用いられる「はも」は二八例あり、回想する対象は場所（三例）・景物（五例）・人物（当該歌を

含め二一例）である。<sup>⑩</sup>「はも」に人物が上接する例の内、「隠り妻」を回想するのが四例、当該の二四八九番歌と同じく言葉が発したさまを回想するものが七例ある。

以下が「隠り妻」に下接する例である。

14 秋萩の花野のすすき穂には出でず我が恋ひ渡る隠り妻はも  
 (⑩二二八五 作者未詳)

15 色に出でて恋ひば人見て知りぬべし心の中の隠り妻はも  
 (⑪二五六六 作者未詳)

16 しなが鳥猪名山とよに行く水の名のみ寄そりし隠り妻はも

〈二に云ふ、「名のみ寄そりて恋ひつつやあらむ」〉

(⑪二七〇八 作者未詳)

17 里中に鳴くなる鶏の呼び立てていたくは鳴かぬ隠り妻はも

〈二に云ふ、「里とよめ鳴くなる鶏の」〉

(⑪二八〇三 作者未詳)

いずれも秘めた恋を詠むが、14・15では人目を恐れ心の中で思う「隠り妻」、16では噂を立てられた「隠り妻」、17では人の耳を恐れ声を上げて泣かない「隠り妻」が回想されている。秘すべき恋をする「隠り妻」は、自らの意思や恋の状況の詳細が描かれない。それ故、「はも」によって、14・15のように詠み手の心の内、16「しなが鳥猪名山とよに行く水の名のみ寄そりし」という立てられた噂の大きさ、17外聞を恐れて泣かない女性の姿が回想される。「隠り妻」はその恋を、いかに秘すべきだったか、どのように隠したか、という点が回想の中心となる。恋の詳細を語るよりも、「隠り妻」との秘めた恋そのものが歌のテーマとなるため、心の内や噂の大きさ、泣き方を具体的に描写しながら「はも」によって回想するのである。

一方、当該の二四八九番歌と同じく、言葉が発する様を回想するのが、以下の例である。

18 かくのみにありけるものを萩の花咲きてありやと問ひし君はも

(③四五五 余明軍)

19 泊瀬川速み早瀬をむすび上げて飽かずや妹と問ひし君はも

(⑪二七〇六 作者未詳)

20 朝な朝な草の上白く置く露の消なば共にと言ひし君はも

(⑫三〇四一 作者未詳)

21 夕さればみ山を去らぬ布雲のあぜか絶えむと言ひし児らはも

(⑭三五一一 東歌 未勸国雑歌)

22 大海の奥かも知らず行く我を何時来まさむと問ひし児らはも

(⑰三八九七 作者不審)

23 大君の命恐み出で来れば我取り付きて言ひし児はも

(⑳四三三八 防人歌)

24 闇の夜の行く先知らず行く我を何時来まさむと問ひし児らはも

(㉑四四三六 防人)

18は、大伴旅人が亡くなった際に、余明軍が思慕して作った歌である。旅人が「萩の花は咲いているか」と尋ねたことが「かくのみにありけるもの」と抗うことのできない死とともに回想されている。19は、寄物陳思「川に寄せる」の歌で、泊瀬川の早瀬の水を手ですくい上げて「飽きることはないか、妹」と尋ねた「君」が詠まれる。18・19は現状への問いの回想である。18は「萩の花」が咲き始める七月二五日に詠まれ、旅人は「萩」の開花を心待ちにしながら亡くなったことがうかがえる。19の速い速度で流れる水ですくい上げ「飽かずや」と尋ねるのは、自分たち二人の仲に飽くことはないか、という意味もあわせもつ。「君」は、二人の恋が流れることなくつないでおきたいと思い、「妹」にも思いを尋ねる。19は、現状への問いであり、「萩の花」がこれからも咲き続けるか、水を今後も飽きることがないかという、行く末に対する問いでもある。19と同じく20・21は男女の恋の行く末を歌う歌である。20では、朝ごとに草の上に白く置く露の消えやすさに重ね「消えるのならば共に」と言い、21では、夕方に山にたなびく「布雲」の離れがたさに重ね「決して絶えることはない」と歌う。20・21ともに、恋を成就させたいという意思がこめられた問いが歌われる。

22と24は類歌で、大海の果ても分からず（用例22）、闇夜の行方も分からないまま（用例24）行く「我」に「何時お帰りですか」と尋ねた「兎」が回想される。23は、言葉の内容は不明だが、大君の命令のままに出て来ると「我」に取りすがって言った「兎」が回想される。22・23・24は、男性の出立に際し、家に残る「兎」が言葉をかける例である。ままならないと分かっているにもかかわらず（用例23）、「何時来まさむ」（用例22・24）とその行く末を尋ねてしまうのである。

また、景行記の、弟橘比売命が倭建命に歌った歌謡にも「はも」が詠まれる。

さねさし 相模さがむの小野そのに 燃ゆる火ほなの 火中ほなに立ちて 問ひし君はも

（二四番歌謡）

弟橘比売命が、航行不能となるほど荒れた走水の海に、倭建命の身代わりとなり、入水した際の歌謡である。相模の小野で、国造に欺かれ放たれた炎が燃え広がる中に立ち、呼びかけた倭建命が回想される。倭建命の「問ひ」の言葉は不明だが、死を覚悟した弟橘比売命は、災禍に巻き込まれた倭建命が自分へ呼びかけた姿を回想するのである。野火の難において、倭建命は「窮地にあつても妻への思いを保ち続け」（新編『古事記』頭注）たと言えるだろう。窮地において相手と呼ぶのは、その相手とのつながりをこれから先も求めるからである。二人の繋がりを信じた倭建命の姿を回想することによって、その思いが達成されない現在を悲劇的に描き出す。

「はも」によって回想されるのは、現在は自分とは離れてしまった相手である。その相手は、詠み手あるいは相手自身に関わる行く末を尋ねる。問いや言葉を投げかけた相手が回想されるのは、相手からの問い、すなわち相手が信じた行く末を実現できなかったという愛惜と悔恨の情が含まれるからである。「はも」による回想は、記憶の中にある揺るぎない思いを抱いた相手を、直接話法を用い鮮明に描き出すのである。

用例 14 ～ 20・古事記二四番歌謡のように、「はも」は、二人の行く末を信じる問いを行う相手の姿を回想し、現在においてそうした行く末は訪れなかったことを確認する表現なのである。

当該の二四八九番歌は、まだ実らない「下枝」を手に取りながら、すでに決意した恋の行く末を「橘の本」で問うた「子」を追憶する。「子」の「下枝」を取るといふ動作と「成らむや、君」という「問ひ」に寄せて、さまざまな男女の出会いの場となった「橘の本」での「我」二人の恋を「はも」によって回想し、実を結ばなかった愛惜の情を陳べるのである。

#### 四 「木に寄せる」六首

二四六二番歌は、卷十一の「寄物陳思」に収載されており、二四八四～二四八九番歌までが「木」に寄せて思いを陳べる歌である。この六首は、連作とは考えられないが、「木」に寄せた人麻呂歌集の歌としてのまとまりをもつ。「木に寄せて思ひを陳べる」六首を検討し、「木に寄せる」思いの内実を明らかにしていきたい。

- ア 君来<sup>こ</sup>ずは形見<sup>かたみ</sup>にせむと我が二人植<sup>わ</sup>えし松の木君<sup>み</sup>を待ち出<sup>い</sup>でむ (二四八四)
- イ 袖<sup>そで</sup>振らば見<sup>み</sup>つべき限り我<sup>われ</sup>はあれどその松が枝<sup>え</sup>に隠<sup>かく</sup>らひにけり (二四八五)
- ウ 千沼<sup>ちぬ</sup>の海の浜<sup>はま</sup>辺の小松<sup>ね</sup>根深<sup>ね</sup>めて我<sup>われ</sup>恋<sup>こ</sup>ひ渡る人の児<sup>こ</sup>故<sup>ゆゑ</sup>に (二四八六)
- 或本の歌に曰く、「千沼の海<sup>しほ</sup>の潮干<sup>しほひ</sup>の小松<sup>ね</sup>もころに恋<sup>こ</sup>ひや渡<sup>わ</sup>らむ人の児<sup>こ</sup>故<sup>ゆゑ</sup>に」 (二四八六或本)
- エ 奈良山<sup>ならやま</sup>の小松<sup>ね</sup>が末<sup>つれ</sup>のうれむぞは我が思<sup>おも</sup>ふ妹<sup>いも</sup>に逢<sup>あ</sup>はず止<sup>や</sup>みなむ (二四八七)



オ 磯いその上に立たてるむろの木ねもころになにしか深おめ思おもひそめけむ

(二四八八)

カ 橘たちばなの本もとに我が立たち下枝したえ取り成ならむや君きみと問とひし子こらはも

(二四八九)

アゝエは「松」、オは「むろの木」、当該の力は「橘」に寄せる恋を詠む。アは、「我が二人」で「形見」(偲おもひ草)として植えた「松の木」、その木だから「君」を「待つ」甲斐があるでしょう、と「松の木」に呼びかけるような歌である。イは、袖を振ると見える限界まで立っているが、「その松が枝」に隠れてしまった、という男性を見送る女性の歌である。ウは、「千沼の海の浜辺の小松」が深く根を張るように、深く思い続ける、他の人の恋人である「児」なのに、という歌である。ウの或本歌は、「千沼の海」干渴の「小松」のようにねんごろに心を尽くして恋し続ける、他の人の恋人なのに、という歌である。エは、「奈良山の小松」の梢のように、どうして愛しく思う「妹」に逢わずに済ますだろうか、という歌である。オは、「磯の上」に根を張る「むろの木」のように、ねんごろに心の奥深くから思い始めたのだから、という歌である。

アゝエは、いずれも「松に寄せる」歌だが、アのように「松の木」全体だけではなく、イ「松が枝」ウ・ウ或本「小松根(ね)エ「小松が末」と、「松」のさまざまな部分も「寄せる」対象となっている。

アは、「松の木」が「君」を待った甲斐、つまり「君」と再会することを叶えてくれるはずだと歌うが、この「松の木」は「我が二人」で植えた「形見」の「松の木」である。「君」がいない時の「形見」となる「松の木」は、それ自身は「君」の形代であり、「まつ」という名は詠み手が「君」を「待つ」ことを支え続ける。だからこそ、詠み手の願いを叶えるものとして「松の木」に呼びかけるのである。イは、袖を振りながら出かける夫が「その松が枝」に隠れ見えなくなっってしまったことを歌う。「松が枝」は、夫の姿を遮断し、見送りを終えた時を告げる景物となる。ウ・ウ或本歌では、「小松」の「根(ね)」が深く張る様が、「根深めて」「ねもころに」を導く序として詠まれる。「人の児」という他の人の恋人

でありながら心深く思うことを寄せる景物として、植物が生育するには過酷な環境の「浜辺」「海」でも深く伸びる「小松根（ね）」が詠まれる。エでは同音の「うれむぞ」を導く序として「奈良山の小松が末」が詠まれる。「うれむぞ」は反語を導く副詞で、愛しく思う「妹」にどうして逢わないままでいようか、いや必ず思いを遂げる、という「妹」への強い恋情が詠まれる。「奈良山の小松」は奈良山にいる「妹」の姿であり、自身の強い思いをその「小松が末」という景物の音によって導く。「松に寄せる」歌において、その部位の特質に合わせ、多様な恋の状況や思いを詠んでいることが分かる。

オで詠まれる「むろの木」は、十メートル以上になることもある常緑高木の「ネズ」とされ、その根は入り組み密集して張る。そうした「むろの木」の根の様子に、始めから深く思ってしまう袋小路に迷い込んだような恋の状態を寄せる。そして、当該の力は、「橘」の「下枝」を手にし揺るぎない恋の思いを抱き、恋の行く末を問うた「子」を回想する。本来なら恋の成就の場となる「橘の本」での「我」二人の叶わなかった恋の悲しみを「はも」が鮮明に浮かび上がらせる。「木に寄せる」六首は、植物の細かな特質に即して、さまざまな恋の状況や心情を細やかに詠み上げているのである。

### おわりに

二四八九番歌は、「橘の本」での「我」二人の叶わなかった恋を愛惜する歌であった。街路樹として植えられた「橘」は、その「本」で、多くの男女が出会い、多くの恋が実った。「我」二人は「橘の本」に並び立ち、「子」は恋の行く末を信じて、自分の手に届く「下枝」を取り、「成らむや」と、詠み手に二人の恋の成就を委ねる。毎年必ず実を結ぶ「橘」とは異なり、「我」二人の恋は成就しなかった。「下枝」を取り「成らむや君」と問うた揺るぎない思いを抱いた「子」の姿が叙述され、相手が信じた行く末を実現できなかった愛惜と悔恨の思いを陳べる。「はも」という、果たせなかった過

去を回想する言葉によって、過去の実を結ばなかった悲しい恋が、現在に鮮明に浮かび上がるのである。

注

- (1) 万葉集の引用は『新編日本古典文学全集』による。私に改めた箇所がある。
  - (2) 森本治吉『万葉集新見』（人文書院、一九四一年四月）
  - (3) 大岡信『私の万葉集』三（講談社学術新書、一九九五年十月）
  - (4) 訓読は不明だが万葉考・安藤野雁も序詞とする。
  - (5) 澤瀉久孝は「我が」と「我を」（『短歌研究』一九四二年一月、後に『万葉集古径』二（中公文庫、一九七九年六月）所収）において、④「モトニワラタテ」の訓読の正当性をより詳細に述べている。
  - (6) 菊澤季生「古代の代名詞「アレ」「ワレ」の區別に就いて」（『新興国語学序説』文学社、一九三六年四月）  
また、東城敏毅は、菊澤説を受け、防人歌の「ワレ」について「集団意識の表出」があるとす。〔初出『万葉集』における「あれ」と「われ」―「孤」的意識と集団意識の表出―』（『実践国文学』五五、一九九九年三月、後に『万葉集防人歌群の構造』（和泉書院、二〇一六年十一月）所収）
  - (7) 一人称複数の「ワレ」について、村田正博は、人麻呂歌集略体歌において「吾等」と表記されることを指摘する。また稲岡耕二は、略体歌において「吾」は、一人称複数を示す「吾等」の表記と「融合し身分の状態にあり」、一人称単数にも一人称複数にも用いられるとする。一人称複数を示す略体歌の例として、以下の二例を挙げる。歌は、稲岡の訓読による。  
網引あみひき 海人あま哉見やみ 飽浦あつうら  
わがとも いろはむむ 清荒磯きよあらいそ 見来吾みこわれ ⑦一一一八七番歌  
我衣わがえ 色取染いろとりぞめ 味酒あじ 三室山みむろのやま 黄葉もみぢ為在みこわれ ⑦一〇九四番歌  
ともに、一人称単数とも複数とも理解できる例である。
- ・村田正博「人麻呂の作歌精神―「吾等」の用字をめぐる―」（『萬葉』九〇号、一九七五年十二月）  
・稲岡耕二「共感の表現―「吾」と「吾等」―」（人麻呂の表現世界―古体歌から新体歌へ―）岩波書店、一九九一年七月）  
(8) 上野理担当「たちばな」（稲岡耕二編『万葉集事典』別冊国文学四六、学燈社、一九九三年八月）

(9) 拙稿「初期万葉二〇一・一〇二番歌の解釈―実ならぬ「玉葛」という景」(『大妻国文』四二号、二〇一一年三月)において、植物の成長と恋愛の進展について述べたことがある。

(10) 渡瀬昌忠は、「東の市の植木の木足るまで会はず久しみうべ恋ひにけり」(③三一〇)と当該の二四八九番歌と用例9・10について「男女相会の街路樹の本に相手を思慕する恋歌」「おそらくは宴席の詠題で、それゆえに、恋歌ではあるが、雑歌の部に収められているのであろう」と指摘する。(『泣血哀慟歌の表現とその背景―万葉時代の道と市―』(『渡瀬昌忠著作集』七、おうふう、二〇〇三年三月)

(11) ◎場所の例「島の宮」(②一七一 日並皇子舎人)「津乎の崎」(③三五二 若湯座王)「家の庭はも」(④五七八 大伴三依)

◎景物の例「栢の枝」(③三八七 若宮年魚麻呂)「きぬわた純綿ら」(⑤九〇〇 山上憶良)「石の橋」(⑦一二八三 人麻呂歌集非略体旋頭歌)「をみなへし」(⑩四三二六 大伴家持)

◎人物の例「隠り妻」(用例14〜17)〈言葉を発する人物〉(用例18〜24)「逢ひし見らはも」(③二八四 春日老)「家の見ろ」(⑭三五三三 東歌未勸国相問)「家の見ら」(⑭三五三四 東歌 未勸国雑歌)「泣きし見ら」(⑭三五六九 防人歌)「さ寝し見ら」(⑭三八七四 作者未詳)「見ろが肌」(⑭四四三二 防人歌)「寄そり妻」(⑭三五二二 東歌 未勸国相問)「汝と二人」(⑭四九二 東歌未勸国相問)「父母ら」(⑤八九〇 山上憶良)